



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	東北地域，北海道における観光創造の新展開：地域に寄り添う観光創造の勧め
Author(s)	真板，昭夫
Citation	CATS 叢書，11，125-133
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66694
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_18.pdf



東北地域，北海道における観光創造の新展開

—地域に寄り添う観光創造の勧め—

真板 昭夫

北海道大学観光学高等研究センター 特任教授

1. はじめに

古い話で恐縮であるが，我が国は発展の歴史を振り返ると，1960 年代の所得倍増計画，1970 年代の新全国総合開発計画と，右肩上がりの開発依存型経済成長のグランドデザインを描きながら国の活性化が図られて来た。しかしながら，1990 年代の急激な国際化の波を受け，一方では少子高齢化，人口減少と言う深刻な国内問題の進行の中で，その依存型拡大成長戦略の夢と希望は終焉を告げ，新たなグランドデザインが求められているのである。まさに，高度経済成長時代の「大きいことは良いことだ！」というテレビコマーシャルに代表される従来型の成功モデルはその意味を失っている。この様な状況の中で，新たな国づくりを担う国興し期待の星として登場したのが「観光立国宣言」，「観光立国推進基本法」などに象徴される観光による国興しであった。

2. 観光立国から観光創造への系譜

2020 年，東京オリンピックが開催される。これに向けて全国の市町村が地域活性化の起爆剤にしようと動き始めている旗頭は言うまでもなく「インバウンド観光の推進」である。だが単にどれだけ多くの外客を誘致するかと言う狂奏曲とも思える観光推進の在り方で，本当に未来に繋がるのであろうか。

(1) 松下幸之助の問題提起—観光立国の辯—

今から 63 年前の 1954 年，大阪で観光見本市が華々しく開催されようとしていた時，商売の神様と言われた松下幸之助は，観光立国についてももの申したのである。以下はその要約である。

◎ 素晴らしき哉ニッポン

今年の夢は，訪れる外人客が激増し，アメリカからは「キャロエア世界一周観光国」の来朝が報じられるとともに，一方大阪で開かれる観光見本市には，世界各地からバイヤー達が訪れると言う話である。特に外客を迎えるための研究はまこと低調きわま

る。私はホテルや道路の不備を嘆く前に、こうした観光に対する考え方や認識の不足を大いに嘆きたい。

観光とはけっしてそんなに軽々しく考えてよいものではない。殊に日本においては、観光は決して単なる見世物商売ではなく、それは、持てるものが持たざる者に與えるという崇高な博愛精神に基づくものだと思ふ。

中略——— わが国は今、観光に基礎をおくべき絶好の時期に来ていると思う。今まで我が国が、自然の美景を十分に活用しなかったのは惜しまれるが、今日は何ものかにも条件が揃っている。だからこそこの時に、着実な観光開拓の具体策がたてられたならば、我が国の再建はもっと早く進んでゆくと思う。

観光立国こそ、我が国が、もっとも適しているものに、その基礎を置いているといえるだろう。私が観光立国を、声を大にして叫ぶ所以なのだ。

◎ 世界平和は観光より

ソロバンだけでは弾けない無形の利益がこれまた限りなくある。即ち、まず第1にお互いの日本人の視野が国際的に広くなると言うことである。

しかし何と言っても観光立国によって生み出されてくる最大の利益は、日本が平和の国になると言うことだ。

観光立国によって全土が美化され、文化施設が充実されたならば、その文化性も高まり、中立性も高まって、奈良が残され、京都が残されたように、諸外国も日本を、平和の楽土として盛り立ててゆくことだろう。だから観光立国は何も金儲けのためだけでやるのではない。持てるものを他に與えるという博愛の精神からも、また国土の平和のためという崇高な理念からも、堂々とこれを実行すべき唯一の立国方策なのだ。これほど重要な立国方策なのだから、これを実行するためには、どうしても専門の役所を設けなくてはならない。行政機関を整理するだけでなく、必要な場合には、拡張も必要だし新設も必要だと思う。だからこの際思い切って観光省を新設し、観光大臣を新設し、観光大臣を任命して、この大臣を総理、副総理に次ぐ重要なポストに置いたらいい。そして国民に観光に対する強い自覚を促すと共に、各国に観光大使を送って、大いに宣伝啓蒙もしたい。また現在、数えきれないほどたくさんある国立大学の中、そのいくつかを観光大学に切り替えて、観光学かサービス学を教えることによって、優秀な専門のガイドを養成したいものだ。

お互いにこの際、もっと伸び伸びと日本の在り方を考えてゆきたいものだと思う。そうすれば日本の繁栄は大いに期待できると信じる。私が観光立国を提唱するのもここに起因するものだ¹⁾（文芸春秋 昭和二十九年五月号）。

まとめるならば、観光がもつ理念、即ち金儲けのための観光ではなく、より崇高な観光の役割と意義として、

1. 持てるものが持たざる者に與えるという崇高な博愛精神
2. 観光による世界平和の実現への貢献

を掲げ、その実現のためには

3. 観光省を新設
4. 各国に観光大使を
5. 数ある国立大学のいくつかを観光大学に
6. 優秀な専門のガイドを養成

が必要だと提言しその実現を求めたのである

(2) 北大における観光創造の理念的基盤

2006 年、北海道大学に国立大学初の「観光」を学ぶ場として国際広報メディア・観光学院が誕生し、同時に観光学高等研究センターが設立された。その設立に惜しめない労力を注いだのは言わずもがな、私を北大に誘ってくれた「観光創造学」の提唱者である石森秀三である。この「学の理念」を学ぶ場として、松下幸之助の唱えた「数ある国立大学のいくつかを観光大学に」を受け継ぎながら、観光研究分野の開拓と人材の育成の場としての開設を様々な抵抗をはねのけ国立大学の中に実現させたのである。北大の学院案内 HP には要約すると以下の様に紹介されている²⁾。

高度な専門的人材の養成に当たっては、以下の3つの能力の育成に重点を置いている。
地域の自然・文化資源等に関わる価値を創出する「価値共創」力、民産官学の多様な利害関係者の協働関係を構築する「地域協働」力、社会的課題を抱えた海外諸国・地域に実践的に応用する「国際貢献」にかかわる力

この「観光創造」が提唱される前に、石森秀三はその基となる観光のもつ哲学的意義として「観光文明論」を唱えている。この提唱は、観光学をうがって見ていた世界中の人類学者や民俗学者、研究者、観光産業を始めとする国内外の人達に衝撃を与えた。

私なりの解釈で恐縮だが、「観光文明論」とは、国際化の急速な進展で国と国、人々と人々の価値観の垣根がなくなっていく中で、世界中の人々を幸せにする未来の文明の利器として「観光」がその役割を果たすと言う主張である。そして世界での IT 革命や交通革命によって急速に様々な交流が起こりその結果、爆発的とも言える観光革命が起こるとしている。

では観光文明を可能とする観光とはどのような観光を示しているのか。石森は、従来の他者依存型の外発的観光ではなく、他者に依存しない、自らの地域を自らの手で造りかえ、国興しへと繋げて行く内発的観光、これを「自律的観光」と定義し、その構築を訴えてい

る³⁾。そして石森はこのような観光の構築を促す新しい学問の体系を作っていかなければならないと訴え、その学問の方向性として「観光創造論」を打ち出した。

石森秀三は講義の時よく口癖で研究の目的として「世の為、人の為」あるいは「何が大切なのか」、「楽しみは何か」を考えろ！と言う。これは研究のための観光研究ではなく、既存の学問の枠にとらわれない、個人の平和、人の幸せを実現するため研究、そういった研究の創造の必要性和研究の推進を訴え続けて来たのである。その結実が国立大学初の国際広報メディア・観光学院と観光学高等研究センターであったと言える。

(3) 地域資源等に寄り添い価値を創出する「価値共創」型の観光創造

①「価値共創」「地域協働」型をめざす観光創造の原点

観光の語原はご存知の様に「国の光を観る」にある。観光創造の原点は、まさに観光の「光」の意味する地域の「誇り」を探し、その「価値」を地域内外の人と連携し、観光と言う仕組みを用いて高めて行くに価値共創、地域協働にある。

私はこの活動を、日本型エコツーリズムによる「宝探し」と呼んで、東北地域や北海道の市町村に内在する多種多様な宝を探しだし、その宝を活用することで持続可能な観光まちづくりを実現していくフィールドワーク型研究の展開を1990年代から行っている⁴⁾が、実はこの「宝探しによる国興し」は、1990年代に提唱した280年以上前に既に行われていたのである。

②江戸時代の宝さがしと国興し

◎『産物帳』とは

八代将軍吉宗の時代に、本草学者・丹羽正伯を中心に実施された「享保・元文の産物書上」(以下、『産物帳』)調査(享保20～元文4, 1735～1738)がそれである。幕府が全国の大名領、天領、寺社領などに対して、農作物、動植物・鉱物など、天産物を調べ上げ、「一切の産物をことごとく漏れなく書き上げ」提出するよう命じたのである。日本列島全体を対象に、わが国で初めてなされた本格的かつ最大規模の国の知られざる地域自慢の資源発掘の画期的な事業であった。

『産物帳』は、産物を書き上げた本帳、絵図帳、註書の3部でワンセットになっており丹羽正伯のもとに集められた⁵⁾。その数は蔵7棟分にもなったとさえ言われている。

◎ 今日と類似する『産物帳』の時代

なぜ、このような調査が行われたのか。享保という時代と深く関わっている。『産物帳』がつくられた享保年間とは、江戸開幕前後から元禄時代まで100年続いた大開発時代が終焉し、高度成長経済から安定成長、低成長へと移行して行く時代であった。

戦国時代末から江戸時代初期にかけての大規模河川の改修や流路変更、大河川河口の低湿地帯の大干拓をはじめとする新田開発の奨励は、「耕地総面積が室町時代のその約3倍になる」というほどの急成長をとげたわが国での歴史でも珍しい耕地の大量増出時代であっ

た。その結果、経済成長が人口増加の持続をもたらし、この成長を続ける人口・経済に食料・原料・燃料を供給するための、開発ブームが始まった。それにより生活空間は低地から高地までめざましい拡大をみせたのである⁶⁾。まさに列島大改造による高度経済成長の時代であった。

このような高度経済成長を背景に元禄文化が開花するが、この繁栄が転換点を迎え、新たな方向が模索されていたのが享保という時代であった。低成長、あるいはマイナス成長時代への直面であり今の状況と類似する点が多い。このような人口や農地の拡大の停滞、経済拡大がピークを打つ中で、見いだされた国興し策こそ、国に内在し、地域住民によって維持されて来た地域の誇りである資源を、再度、国を含めて高度に利用することによって価値を高め、成長の活路を見出そうと言うものである^{7) 8)}。いわば国の価値の総点検であり、『産物帳』はまさに「所与の資源」の総点検発想から生まれ実行された「価値共創」「地域協働」そのものであった。

◎ 「地域資源列島」から「特産物列島」へ

観光による地域づくりには常に二つの側面が存在する。一つはその地域を訪れる人々におもてなしを持って満足感を与える仕掛けづくりであり、もう一つは、その地域を、見たこともない、聞いたこともない人々にその地域の魅力を知らしめ、訪れたいという仕掛けの創造である。この後者の、地域の魅力を日本全国各地に知らしめ、行きたいという様に促す役割を果たしているのが、土産物、観光名物・観光名産といわれるものである。それが他には見られない魅力あるものであればあるほど一度はその地域を訪れてみたいとなる。観光のデスティネーションキャンペーン等でいわゆるお土産や物産が地域の観光大使の役割を果たし紹介されることが多いが、このお土産や物産の大半は、この時期（元禄から享保期）に端を発するものがいまだ多くを占めているのである。いわば、今日の国内外に向かっての地域の魅力、ひいては我が国ニッポンの魅力はこの時にその基盤が出来上がっていたと言っても過言ではないのである。この 280 年以上前の諸国産物編纂という宝探しによる国土の深耕は、低成長を切り抜け江戸経済の再活性化に導いていったのは言うまでもない。このときはじめて、今風に言えば、「日本と言う国とは何か！」と国、藩、地域住民、が認識し、その価値共創作業に一丸となってつきすすむ基礎の原形が形成されたといってもよいだろう。「宝さがし」、つまり己の誇りの価値を知り共有することが、国興しのすべての出発であることを、『産物帳』は教えているのである。

3. 北海道と東北地域の観光創造と新展開

ここでは関わりの深い東北地域や北海道での観光創造を、どのような視点でとらえていくべきか考察してみたい。

(1) 催事中心とする祭り等のイベント観光の限界

3.11 東日本大震災復興策の目玉政策として県庁所在地を中心とするイベント型観光に多大な資金が投入され大手旅行業や広告業界主導のもとに実施された。多くの人を集め、お金を落とさせることによって経済復興がなし得るとして進めて来た東北 6 県イベント型観光である東北六魂祭りはその代表例である。2011 年の宮城県仙台市の七夕まつりをスタートに 1 年に 1 度開催され、岩手県盛岡さんさ踊り、福島市わらじ祭り、山形市花笠祭り、秋田市竿燈まつり、2016 年、青森ねぶた祭で東北を一巡した。最後の青森では 2 日間で 27 万人を動員したと報告されている。大量の観光客誘致型のイベント化された観光は期間中、市内での交通規制が出るほどのにぎわいが見られた。しかしこのにぎわいとは裏腹に、一步市内を出て、実被害を被った東北地域の農林漁業を主産業とする市町村を訪ねてみるとは、復興支援にはこの様なイベント動員型の復興策では限界があることが見えてくる。実際に被災した地域のゼロからの復旧、復興、振興という持続的活動に対して、経済効果や復興意欲を高めることにはあまり効果が発揮されなかったのである。ある研究報告によれば、地域内の経済格差の拡大や社会問題発生の原因となっているという報告もある⁹⁾。では農漁業を生業の柱とする市町村対象の観光の在り方とはどの様に考えれば良いのであろうか。

(2) 東北地域のお宝と観光創造の新展開

東北はどのような地域か？と問われると、数字的には以下のような紹介がなされている。「太平洋側で漁業が盛んで、漁獲量・収穫量の合計値は全国シェアの約18%で、農業産出額に至っては全国の約2割を占めている。我が国の主食である米の収穫量は、全国の約35%で安定的に推移し、地域産業と密接の結びついた食文化、伝統工芸、多彩な伝統工芸品を有する地域」¹⁰⁾。また自給率100%を超える優良地域でもあるのだ。

しかし農産物産物の安定的な生産地としての地位の確立は一朝一夕で出来上がったものではない。その裏には長年にわたり生き抜いて来た人々の努力と知恵の蓄積、そして次世代への継承があってこそ成り立って来たのである。

筆者が関わっている旧南部藩の岩手県二戸市で、震災直後の2011年に地域の宝を基にしたまちづくり「全国エコツーリズム大会一食文化等地域に根ざした宝による観光の可能性を探る一」が開かれた。その時のパネルセッションで東北の宝、食文化について宮城教育大学の民俗研究者の結城登美雄氏から次のような発言があった。

「東北で米が普通に取れる様になったのはつい最近のことである。彼らの命を支えて来たのはアワ、ヒエ、キビ、ソバ等の雑穀である。この雑穀に頼らざるを得なかった背景にあるものは東北の気候である。東北は必ず雪が降り12月から4月は食料のストックが必要となるが、米は不安定であてにならない。当てにならないものは主食にならない。当てになるものは、米、雑穀のあわせ技一本とした食の知恵である。そしてそれを美味しくするために女性が頑張ってきた雑穀の食文化がある」「また東北の文化の背景には飢饉、地震、津

波と言った災害との戦いの知恵がある。『豊年マス、飢饉シャケ』という言い伝えがあり、シャケ千本で人間の命一人の意味があり、シャケ供養塔が建てられている。草木供養塔、魚介類供養塔もある。東北地域では生き物の命にはぐくまれて生きている。その大切さを伝えて、今日に至っている持続的な文化力こそ地域の宝だと言える」と語っている。そして「人間の力だけでは成し遂げられない、神様の力も必要との心があるといった東北には穀物を供養した信仰心があり、自然への敬愛の念を心の底で養っている地域である」と続けた。

この発言が示す様に東北地域には、生き抜いて来た知恵の蓄積とそれを継承して来た文化力がある。すなわち美味しい水、段々畑の里山の風景、山、川、海からの豊富な食材、豊年祈願、豊作感謝の祭り、郷土食、竹、漆、ブナ等を使った巧みな製作技術や工芸品、そして、住民同士の食べる力と作る力がしっかりと手をつなぎ継承していく村人の思いや運営の仕組み、その仕組みを象徴する民間信仰の拝所や神社仏閣がある。言い換えれば東北の宝とは、生きる為の生産活動を通じて生み出されて来た知恵の足跡全てが宝なのである。もっと言えば地域で生活し続けている人々全てが、その存在そのものが貴重な宝なのであると言っても過言ではない。いま東北地域と語ったが、農林漁業に依拠して生活する我が国の多くの地域に当てはまる言葉だと言える。そういえば、世界遺産地域である富山県南砺市五箇山を紹介するポスターに、

「都会は人がつくり、田舎は神がつくる」

「毎日が世界遺産」

とあったが、誠に言い当てている言葉であると感じた。

当然、北海道においても同様である。アイヌの自然と向き合っ融合することで生活を維持して蓄積して来た固有の文化力があり、また入植した人々の自然と対置しながら、ふるさとから継承した知恵と技術を応用し生き抜いて来た開拓の知恵の歴史の文化力が存在する。これこそ国内外に観光において持続的に人々を引きつける「住んでよし、訪れてよし」を実現する固有の宝ではないのか。よく北海道の魅力は山並みの風景、そこに息づく野生動植物、パウダースノーなど手つかずの自然の美しさが強調されるが、雄大な自然はそれはそれで素晴らしいのだが、それだけが北海道が外に向かったの本当の誇れる魅力と言えるのだろうか。私はむしろ、近年北海道で注目しているのは、自然によりそうアイヌ文化であり、また一方で開拓の結晶として出来上がった農の雄大な風景であり、それを海外に知らしめる観光大使としての個性の詰まった農の食材であると思っている。

筆者は仕事柄、様々な世界各地の自然を調査したり見て回ったりする機会に数多く恵まれて来たが、自然に限って言うならば、同様かもしれないがそれよりもっと魅力的な地域は世界中に数限りなく存在する。そのため、石森の言う爆発的な観光が様々なインフラの充実

と発達によってさらに促されたとき、北海道の自然を軸とするコンセプトのみでは多くの人々に飽きられてしまう予感を感じる。

私は、これから地域主体の地域に寄り添う自律的観光を考えるならば、以前 JTB 会長の田川氏が石川県のエコツーリズム研修で「これからは生活者との交流がなければ旅とはいえない。大切なのは日本人の日常行動、生活体験、おばちゃんにあえる等の人の顔が見えること」と語っていたことを思い出すが、まさに、地域の生産活動によって積み上げられ維持されている地域のお宝を発掘し、ストーリーを組み立て、「人の顔と日常の見える観光」に組み立てて行く戦略策定が必要ではないかと思える。さらに、そのお宝を生み出している農林魚業の生産物の販路拡大に通じる地域からの観光戦略を組み立て、そのお宝を維持して来た「地域社会の仕組みの強化」に通じる観光の仕組みづくりこそ「観光創造」の役割ではないか。

4. 終わりに

東北地域や北海道の観光はディズニーランドの様な大型施設型観光や種々の大型イベント型観光の様な「客が来てなんぼ！」をめざす観光では長続きはしない。地域に存在する宝は持続的な農林魚業の生産活動によって生み出され、今日まで維持されていることを意識し、一次産業と観光産業の一体化の戦略を組み立てていく高度な技量が求められる。そのためには、お宝の活用が安定的な農産物収益の確保に貢献し、かつその地域社会における持続的な活性化の仕組み構築を担う人材の確保があって初めて意味を持つことを忘れてはならない。北大の観光創造の使命とは、この点から考えれば、「持続的なまちづくりの仕組み構築を担う実践的かつ高度な知識を身につけた人材の教育と育成」、そしてその人材を持って「北海道、東北からの世界にむけた観光立国のグランドデザイン構築と発信」を実現することではないかと思うのである。

参考及び引用文献

- 1) 『文芸春秋』昭和 29 年 5 月号 (1954 年 5 月)
- 2)
http://www.imc.hokudai.ac.jp/exam/docs/2015IMCTS_Panf_jp.pdf#search=%27
国際広報メディア・観光学院 (参照 2017-01-17)
- 3) 『エコツーリズムの総合的研究』23, 2001, 国立民族学博物館
- 4) 宝探しによる地域おこしについての詳細は二戸市を事例とした『地域の誇りで飯を食う』2016, 旬報社に述べられている。
- 5) 諸国の編纂した産物帳は元文 4 年 (1736 年) には提出されたようだが、丹羽正伯は、それらに目を通し、地方名で記されていたりして名称だけではわからないものには絵

図と説明を、あるいは註書をつけて再度提出するよう命じている。その結果、丹羽正伯の分類にしたがって書き上げた本帳と絵図帳、及び註書の3部が産物帳のワンセットとなった。

- 6) 鬼頭宏『文明としての江戸システム』日本の歴史 19, 2002, 講談社
- 7) 「バブル後の再建は江戸時代の発想に学ぼうー景気回復待望論を排す」『農文協の主張』1998年9月号
- 8) 速水融・宮本又郎編著『経済社会の成立ー17～18世紀』岩波書店
- 9) 樋口葵「地域復興における観光推進策が市民レベルに及ぼす影響分析：宮城県南三陸町を事例として」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』31, pp. 393-396, 2016年12月
- 10) 国土省国土計画局 平成23年6月(2010年)